

## 何のために働くのか —自分を創る生き方—

寺島実郎 著

今日の若者は、サービス業の増加、分業化・効率化、グローバル化、IT革命の果てに、「自分が納得のいく仕事」を見つけにくい時代に生きている。

著者は、三井物産に入社。現在は、日本総合研究所会長、多摩大学学長等を務めるとともに、評論家としても幅広く活躍されている。

本書は、どうすれば生き生きと働くことができるのか。商社マンとして、世界を舞台にビジネスの最前線で活躍してきた著者が、渾身の力で、その問いに答える一冊である。

「はじめに」では、働く意味を探りながら、若者に考えるヒントを提供し、人生を創りあげることとは何か。やりたいと思うこと、打ち込むに値する仕事を見つけてやり通す。そして、仕事を通じて自らの職能を高め、社会に貢献していく。若い人たちにもそんな働き方をしてほしいし、その可能性はあると指摘している。

第1章「働く意味を問う」では、なぜ働かねばならないのか、失われていく仕事の喜び、社会にでなぜ若者は落胆するのか、自分探しをしても自分は見つからないなどについて述べている。そのためにはまず、自らを見つめ、柔軟い思考で立ち上がること、社会を少しでもよりよいものに変えていこうと努力することが大切なのであるとしている。

第2章「創造的に働くフロントランナーに学ぶ」では、先達たちが、どのように使命感に目覚め、社会を変革していったのか、具体的な事例を紹介している。そして、使命感の自覚、気付きと行動力、人間力と「素心」について指摘し、どの人からも惹きつけてやまない魅力、人の心を捉え動かす力をもつ者が、人との信頼関

係を築くことができる。そうした「素心」をもたらし人との出会いによって助けられ、支えられながら、自分を創ってきたと述べている。

第3章「わが人生を振り返って」では、高校・大学時代、アルバイトや商社マンとして著者自身の半生を振り返った体験を紹介している。そうした、様々な出会いや出来事、与えられた仕事に挑戦することで、自分のやるべきこと、自分というものが見えてくると述べている。

第4章「新しい産業社会への視線—時代認識への示唆—」では、就職を控えた学生たち、そして働く現場で悩む若者に、これだけは知っておいてほしい世界経済のメガトレンドを述べている。事例として、グローバル化と全員参加型秩序、アジアダイナミズムとネットワーク型の世界観、IT革命の本質、食と農業の未来、技術と産業の創生とTPP問題、エネルギー・パラダイムの転換の6項目を挙げて解説している。

第5章「企業の見極め方」では、自分は何がしたいのかを突き詰めるには、これまでの人生で学んだことや、大学で身に付けた知識などを手掛かりに、自分の関心のある領域、職域を自分に問いかけてみることを提案したいとしている。そして、もし自分ならどうするか、会社や社会に自分は何ができるのか、まずは、自らの意思で行動を起こすことであると述べている。

第6章「人は何のために働き、そして生きるのか」では、自分の責任において担うべきことは、胸を張って担い、その上で、本人の責任を問われるべきでないことで苦しむ人たちに温かい眼を向け、不条理な世の中の仕組みや制度を変える気迫を若者には求めたいとしている。

最後に、自らの人生に立ち向かう若者に心から「グッドラック」という言葉を贈り、健闘を祈りたいと著者は結んでいる。

(文春新書、210頁、750円+税) (渡邊 隆)